



## 話題の本棚

浅田次郎、角野栄子、金原瑞人、さくまゆみこ、沼野充義編『小学館世界J文学館』  
閻連科著、桑島道夫訳『四書』

## 特集／若手作家

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seikyoku/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/)

「二〇二六」二〇〇年の結晶、新時代の名作児童文学全集

小学館世界J文学館

浅田次郎・角野栄子・

金原瑞人・さくまゆみこ・

沼野充義編

小学館



まさに「文学館」な一冊なのです。いや、もはや一冊というべきではないのかも。なにせ、この「二冊」は「二プラス二五冊」と同義だから。

つまりどういふことかという。①本屋さんに行きます（ネット書店でもよし）。②『小学館世界J文学館』（リアル本）を一冊購入します。③本に付いているシリアルナンバーを用いて二五冊の電子書籍が読めます。「二二二六」のタネ明かしは以上です。

次に、「J文学館」の「J」とは？「児童、ジュニア、次世代」を意味するそう。そう、この本では、世界中の児童文学の名作たちが集められています。『小学館世界J文学館』とは、創立以来子どもとともにある本作りを手がけてきた小学館が、創立二〇〇周年の機に作り上げた、これまでの歴史の結晶であり、これからの進路の指針ともなる作品でもあるんです。

さて、それでは『小学館世界J文学館』（リアル本）を開いてみましょう。いや、その前にちょっとお時間を。この本、とっても素敵な見た目をしているんです。どどーんと大きな、図鑑のようで、本屋さんでも圧倒的存在感。手に感じる重みに反比例して、心は本の中で待っている物語との出会いにわくわく、浮遊していきます。

福田利之さんの装画にも目を奪われます。空飛ぶ本に乗るアラジン、本のテーブルにつくアリスと白ウサギとトランプ兵、本にぶら下がり遊ぶトム・ソーヤとその下でのほんんと座るプーさん。たくさん児童文学の登場人物たちが、福田さんの味わい深い絵の姿を得て、思い思いに動いています。彼らの物語に思いを馳せながら、今度こそ本の扉をめくりましょう。リアル本は、『アーサー王物語』から始まる二二五の物語がそれぞれ見開き二ページで紹介されている、図鑑のような本です。実は『小学館世界J文学館』では、収録作品の多くが、酒井駒子さんを始めとする第一線で活躍する画家たちにより新たなカバーや挿絵を描き下ろされています。たくさんの魅力的な絵とともに物語のあらすじを紹介し、さらに作者や物語の豆知識まで教えてくれるこの本は、もうこれだけで「ごちそう」です。

でもメインディッシュはこれから。リアル本から拡がる電子書籍の世界。時代は古代から現代まで、場所は欧米、アジア、アフリカと幅広いラインナップ。日本初上陸の作品もいっぱいあります。しかもほとんどが新訳。丹精込めて創られた二プラス二五冊なのです。さあ、名残惜しいですがそろそろおしまい。これは大人になっても、いつもいつまでも少年少女に戻ることでできる魔法の本。わくわくの詰まった最高の冒険へ一緒に繰り出しましょう！ それでは締めのお言葉。

「われと思わんものは、この都に来て、円卓の一員となるがよい。」  
（黄丹）

（二二八頁 税込五五〇〇円 11月刊）

## 中国本土で発禁の衝撃作、ついに日本語訳が登場!!

### 四書

閻連科著  
桑島道夫訳

岩波書店



——忘れられたあの歴史と、死んでいった、  
または生ける幾千万の知識人たちに捧ぐ。



学問に携わる者ならば身が引き締まる猷辞から始まる本書は、中国本土では発禁となったため台湾で刊行されたディストピア作品だ。翻訳されるや否や、フランチ・カフカ賞を受賞した。本書を記したのは、作品の多くが中国では発禁の閻連科（イエン・リエンコ）だ。彼は一九五八年、中国河南省嵩県で生まれた。高校中退後、中国人民解放軍に入隊して職業作家となるが、二〇〇四年に発表した『愉快』（原題：『受活』）が批判を受けたため除隊された。

『四書』の名の通り、本書は四つの書で構成されている。「お上の命を受けて第九十九更生区を監督する」「ごども」が知識人を再教育する様子を神の視点から描く『天の子』。『天の子』で更生区の罪人として登場する「作家」が、お上の命でほかの罪人たちの行動を逐一記録する『罪人録』。作家が『罪人録』を書くために渡された原稿用紙をくすねて、更生区での暮らしを私的に記す『旧河道』。最後は、作家と同じ更生区の罪人だった「学者」が書き残した哲学エッセイを、大飢饉の生存者が紹介する『新ソーシユポスの神話』。

あらすじを読むと一見ただの連作のようだが、実際はそうではない。なぜなら、本書は発禁理由である中国最大のタブー——毛沢東による大躍進政策の無謀な農業政策や製鋼運動、大飢饉といった史実を描き、批判しているからだ。

大躍進政策や文化大革命によって多数の死者を出したことより、中国建国の功績が勝るときれ、毛は「人民の領袖」として中国で未だに根強い人気がある。しかし、著者は内なる真実を描く「神実主義」を掲げて真実の捏造に抵抗しているため、この風潮には迎合しない。内なる真実とは、人の魂や意識の真実、事の発生源だと著者は述べる。これを暴くために現在の現実認識を超越する神話手法を著者は用いる。作中でイエスに言及していることから、キリスト教の四大福音書などを神話手法の一環として意識していると思われる。



ちなみに、中華圏で四書といえは『論語』『大学』『中庸』『孟子』の四書を指す。『論語』で孔子は知識だけを持つ知識人（小人）ではなく、知識と徳性を兼ね備えた教養人（君主）であれと説く。これを踏まえて猷辞を再読してほしい。原文を確認していないため断言はできないが、複数の意味を孕んでいるように思えないだろうか。鎮魂と訓戒、皮肉……あるいはそのほかの意味を。

残酷な描写が多く、正直読んでいて心地よい作品ではない。血の気が引いて指先に力が入らず、頁を繰れない時もあった。だが、危険を承知で捧げられたこの物語を捨て置くなど誰ができよう。真の知識人になりたいのなら、本書を避けては通れまい。

（前髪）  
（三二二頁 税込三六二〇円 1月刊）

## 推し、燃ゆ

宇佐見りん著  
河出書房新社

ふと現実から逃げたくなって本を開いたはずなのに、文学の世界は、どうしようもなく今ここにある現実だった。目を背けてきた細部までもが、ありありと描かれていた。文字をなぞるだけで、絞めつけられるように苦しかった。でも、ページをめくる手はとまらなかった。



宇佐見りん (1999-)。デビュー作『かか』で文藝賞と三島由紀夫賞を受賞し、2作目となる本作『推し、燃ゆ』で芥川賞を受賞。文学界にその名を轟かせる彼女を抜きにして、今、若手作家を語ることはできない。

本作の主人公あかりは、アイドルグループ「まざま座」のメンバー上野真幸を推すことを「背骨」にして生きる女子高生だ。勉強も、アルバイトも、家族との関係もうまくいかないあかりは、推しを推すことに人生のすべてを捧げていた。推しの言動すべてを記録し、解釈することで、推しの見る世界を見ようとしていた。だがある日、推しはファンを殴って炎上する。人気之急落してもあかりは推し続け、やがてあかりの生活は崩れていく。

宇佐見りんがその圧倒的な筆力で描くのは、現代を生きる若者の痛みだ。平凡に聞こえるかもしれない。しかしその痛みは、まさしく同時代を生きる私たちのものなのだ。居場所のない家庭、身体への違和感、慣れない居酒屋バイトのあわたたしさ、SNSへの没入。渦巻くあかりの感情が畳みかけるような短文でさらけ出され、その精緻すぎる表現は、言葉にできないままになっていた読者自身の痛みをも呼び起こしてしまう。

本作は短く、すぐに読めてしまう。ひとまず手に取って、その表現力の凄まじさを体感してほしい。

(たいやき)

(128頁 税込 1540円)



## 特集

## 若手作家

図書館に並ぶ本の作者は、大体死んでいる。かつての新作は名作になり、歴史を振り返るようにして私たちは本を読む。古典とは時を跨ぐ旅であり、流れる時代の違いを、私たちは読書を通して味わう。

しかし、同時代を生きている作家は別だ。一人の作家と同じ時を生きることで、それは当たり前のように、とても奇跡的なことなのだ。この時代の苦しみを、そしてその苦悩から出した新作を、時代の空気とともに味わえる。「あの人と同じ時代に生まれて良かった」。新作を待つこの興奮は、あの人がくれたものだから。

(きもの)

## ハコブネ

村田沙耶香著  
集英社文庫

自分では見過ごしてしまう心の溝に光を当てるのが小説の役割だとしたら、村田沙耶香は若手作家として、誰よりも鋭く、この世の隠れた溝と対峙している。



『ハコブネ』には、人には理解されにくい悩みを抱える人々が、会員制自習室を介して出会い、生き方を模索していく様子が描かれる。男性とのセックスが辛く、自分に当てはまる「性」が分からない里帆。女であることに固執し、病的に日焼けを気にする椿。自分が人間ではなく星の欠片であると感じている知佳子。衝突しながらも生き方を模索していく中で、三人の心が剥き出しになってゆき、読んでいてヒリヒリする。「セックスが辛いのだって、あなたがちゃんと、女をやっていないからじゃない?」「性別ってもっと、柔らかいものなんじゃないの?」「知佳子さんには、わかんないですよ。」

自分が世間の当たり前の外にいると感じた時、うまく合わせるフリをしてしまうことはないか。村田沙耶香の小説は、そんな心の蓋を容赦なく引っ剥がす。現代社会と調和できない誰かの葛藤を痛烈に描き、その苦悩の核心に迫っていく。読み手が苦しくなるほどに。もうそれ以上挟らないで。そう願っても、物語は彼女らの傷の更に奥深くまで迫ってゆく。

目を背けたくなったとしても、あるいはいついて行けないと音を上げたくなったとしても、最後まで喰らい付いて読んでほしい。——自分が適合する「正解」を求めて彷徨う心細さも、あえて自分を押し込める意固地な気持ちも、世界のルールから自分だけが外れているような疎外感も、いつかあなたが目を背けたまま忘れていた、小さなささくれかもしれない。

(茫漠)

(208頁 税込528円)

## これはちゃうか

加納愛子著  
河出書房新社

今回は「若手作家」特集だが、ここで少々変わり種を紹介しよう。本書『これはちゃうか』は、お笑いコンビ・Aマッソの加納愛子による初の小説集である。



近年はメディアで見かけることも増えた彼女だが、実は「WEBちくま」上でエッセイを連載しており、2020年には初のエッセイ集『イルカも泳ぐわい。』を上梓するなど、文筆家としての顔も持ち合わせている。

彼女の魅力は、何と言っても類い稀なるワードセンスと奔放な発想力だ。常人であれば「1→2→3…」と考えるところを、彼女は「Ⅲ→Ⅷ→Ⅸ…」と、ずいずい進んでいく。注意して手綱を掴んでいないと振り落とされてしまいそうな文章のスリル感が、不思議と心地いい。この言語感覚の鋭さと裏腹に、彼女の文章は、不愛想でいてほのかな温もりで満ちている。そしてこれは、彼女が「お笑い芸人」であることと決して無関係ではない。

「お笑い芸人なんてくだらない」とバカにする人もいるかもしれない。しかし、くだらなさや虚しさを見つめた末にしか為しえない営みでもあるだろう。笑いとは、決して具体的な解決策にはならないとしても、人間が人間らしく生きる上で必要不可欠な要素だ。人間はいつの時代だって喜劇を求めてきた。

彼女の全脳細胞は、何よりもまず「おもしろさ」のために、そして目の前にいる人間を笑わせるためにフル稼働している。悲しさに寄り添った上でそれでもなお笑いを選択したAマッソ加納の文章。溢れ出る才能を持った彼女の頭のなかを覗いてみたくなった方は、ネタ含め、ぜひ本書もご賞味あれ。(浅煎り)

(192頁 税込1540円)

## 嘘と正典

小川哲著  
早川書房

「早逝の天才・伊藤計劃に代わる日本のSF作家はいないのか」。最初に小川哲の本を手にとったのは、そんなやや不純な動機からだった。小川のデビュー作『ユートロニカのこちら側』で描かれた監視リゾートは、伊藤の『ハーモニー』の世界を思わせ、評者の期待に十分応えるものであった。しかし本作『嘘と正典』を読めば、改めて認めざるを得ない——「ポスト伊藤計劃」ではなく、「小川哲」という作家のファンであると。

6編の短編からなる本作を貫くテーマは、「歴史」と「時間」である。表題作の「嘘と正典」は、CIA 作員が共産主義の成立を阻止するために、若き日のエンゲルスを裁判で有罪にしようと画策するSFエンタメ。「時の扉」は同じく歴史改変モノだが、こちらは時間の概念そのものを揺さぶる語りと、ぞわりとした読後感が魅力だ。そして読後感と言えば、何といても巻頭話の「魔術師」。このタイムトラベルは果たしてSFか人の狂気か。作品全体によって読者を魔術にかけるような構成に、二度三度と読み返した。そのほか今は亡き父親の痕跡を辿る「ひとすじの光」「ムジカ・ムンダーナ」、失われた流行に囚われた男を描く「最後の不良」も、積み重ねられた時間と歴史によって自分という存在があることを感じられる佳作だ。

マジシャンがやってはいけないことをまとめた「サーンストンの三原則」やケプラーが惑星軌道を音楽として捉えていた話など、各話には話の背骨となる理論があり、それが山椒のようにピリリと効いている。理論と構成で唸らせる小説が好きな読者には垂涎の作品、そして作家が誕生した。

(りっち〜)  
(283頁 税込1760円)

## あなたへの挑戦状

阿津川辰海・斜線堂有紀著  
講談社

『あなたへの挑戦状』。「なるほど、いざ尋常に受けて立とう!」、勢い込んであなたはこの本を開く。と、そこには謎の袋綴じ(本編を読み終えるまで開封厳禁)が! 今時珍しいこの仕掛けが、この本の素敵ポイント1つめ。そして2つめは、この本が今をときめく若手ミステリー作家、阿津川辰海と斜線堂有紀の共作であり競作であること! 「たった一行で人の心に突き刺さるその文章。熱く、黒く燃え滾る情念を抉り取るその筆力」「鮮やかな筆致を、緻密なロジックを、仕掛けられるカタルシスを愛している」。序文に記された、お互いを語る言葉だ。まるで熱々カップルのラブレター、されどこの序文を読んだ者は、もう引き返せない。技巧の阿津川氏、心理描写の斜線堂氏、ある意味正反対とも思われる若き彗星たちは、お互いに惹かれ合う。「けれど、こんなものは100年後には観測されなくなっている。客観性が更新されなくなった関係は、過去のものになり忘れ去られていく。

これは論拠である。100年後、あるいはそれより先の時代に、私達が互いを敬愛していたことを示す根拠である。私達は書くことによってしか遺すことの出来ない小説家だ。だから私は、競作を受けた。」

圧倒的熱量で創られた、奇跡のような一冊。リアルタイムで読める私達はきっと幸福者だ。ちなみにこの本の素敵ポイント3つめはもちろぬ本文である2篇の小説、各々の持ち味が遺憾なく発揮されている。4つめは執筆日記。20頁近くあり小ネタ満載。そして5つめは本文外の伏線回収。「まさか」からの胸アツ。「あなた」にこの兎に角盛り沢山な本の結末を、行く先を観測してほしいのだ。(黄丹)

(288頁 税込1760円)



## 天使の涎

北大路翼著  
邑書林

貫禄は充分にあるが、これでもまだ若手作家なのである。

新宿歌舞伎町、言わずと知れた夜の街。ホスト、キャバクラ、最近では低年齢の行き場のない子がたむろしていたりもする。その片隅に彼と彼を囲む人々はいた。



「俳句一家 屍派」。定期的に歌舞伎町で集まり俳句を詠む句会を開く集団として知られている。その中心にいるのがここで紹介する北大路翼だ。昼の仕事の傍ら夜は歌舞伎町でバーテンをやりながら句会を主催するというからなかなか活動的だ。その周りに集う俳人も様々な経歴の持ち主だが、共通するのは社会からのみ出し者というところだろう。自らの異質さを自覚しながら淡々と詠む。本書や北大路の他の著書にはそんな俳句がみっしりと載せられているが、そこには世間の外れの外れにいる彼らの見る世界が刻まれる。

その中にある一句、「駐車場雪に土下座の跡残る」。はっきり言って私たちは駐車場に土下座の跡があるような所にはいないし、読み手のようにそれが土下座の跡であることもわからないだろう。けれど、こうして俳句という表現を介して彼らの世界や彼らのものの見方が私たちの世界と邂逅する。そこに文学、あるいは表現といったものの面白さがあるように評者には思えるのだ。

若手というよりはむしろ無頼派といったほうが俳句の内容にはあっているかもしれないが、とにかく彼らが吐いて吐き続けた言葉の数々を味わってほしい。

声小さきものから消えて春の闇  
太陽にぶん殴られてあつたけえ

(ねこ)

(174頁 税込 1528円)

## パラレルワールドのようなもの

文月悠光著  
思潮社

私が作家になりたいと思ったのは、中学生の頃。本を読んでいたら、いつか本を書く人になりたいと思ったのだ。自分にとってそれは大それた夢で、仲のいい友人にこっそり伝えた。



……若手作家。同世代の作家で文章が好きなのは誰かと聞かれたら文月悠光の名をあげる。彼女の書く詩は、言葉にできなかった戸惑いや躊躇いが表れている。読んでみると心がキリキリと音をたてる。あの時私は人を傷つけていたんだな、あの時私は傷ついていたんだな。彼女の繊細な描写に触れて、閉ざしていた心の機微に敏感になっていく。

中でも好きなのは「続きを書いて」という詩だ。かつて「一緒に作家になろうよ」と約束した友人・ハル。あの頃作家になるきっかけをくれたハルに一〇年ぶりに彼女が会うと、昔の面影はなかった。「これはこれで幸せだよ」。その言葉に彼女は崩れ落ちた。

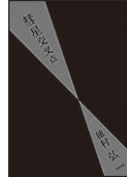
《それでも、あなたが読んでくれるから  
あなたが「書いて」と言ったから  
私は書いてきたんです。  
たとえ彼女の人生に、私が不在でも  
ハルが手渡してくれた、  
物語の書き出しを  
あの冬の教室を  
何度でもこの手の中によみがえらせて》

そういえば私も一緒に夢を語り合った友人がいた。互いに小説を送りあって、いつか本を書けたらいいねと語り合ったあの人は今どうしているのだろうか。この詩を読んだ時、友人の顔と、自分の夢が顔を覗かせた。私もまだ、まだ夢を追いかけているよ。(きもの)

(168頁 税込 2420円)

## 新刊コーナー

## 彗星交叉点

穂村弘著  
筑摩書房

表紙の美しい装丁

が読者の目を捉える。

漆黒の夜空を彷彿とさせるマットな黒地に

を背に、青の線が大胆に走る——あたかも広大な宇宙で二筋の彗星が邂逅し、交叉するかのよう。本書は、「偶然性による結果的ポエム」の考察をテーマにした、現代短歌の旗手・穂村弘のエッセイ集である。

「正解の唯一性に対して間違いには無数のバリエーションがある。そしてその背後には無数の別世界が貼りついている」と述べる穂村の観察眼は、「日常生活の中の言葉の偶然性——間違いや思いがけなさ——を見逃さない。街角でふと耳にした会話、お店の看板や広告、子どもの何気ない一言……。時に誤解や間違いを含むこれらの言葉は、私たちが自明視している規則や常識を易々と飛び越えて、既存の世界像に風穴を開けてくれる。

穂村は、このような偶然性を帯びた言葉に

よる世界の揺らぎを優しく受け止め、むくむくと想像力を膨らませる（この嗅覚と言語感覚の鋭さに、私はいつともへらっときてしまふ）。そして、眠れぬ夜のミルクのように温かい、絶品のエッセイを仕立て上げるのだ。刺激的で新鮮な四月の彩りが、ぬるっとした手触りで返屈な日常へと薄らいでいく五月。そんな時こそ、日常に潜む「偶然」（『綴葉』との出会いも含め！）から広がる世界の豊かさに目を向けてほしい。彗星のように流れ去っていくこの何とない日常も、きっと素晴らしいものになるはずだ。

(二〇八頁 税込一五四〇円 3月刊)

## ゴリラ裁判の日

須藤古都離著  
講談社

この物語は特別なゴリラ、ローズの視点で進む。それが違和感なく受け入れられるのは、ローズが言葉を理解し、人間と会話することができるゴリラだからである。

故郷を離れアメリカの動物園へと渡ったローズは、ある日夫を射殺される。彼女は夫の

理不尽な死に裁判を起すが、結果は敗訴。人間の命が動物の命より優先されたのだ。激しい憤りと失意の中にいた彼女であったが、再び裁判の機会を得る。伴侶を亡くして悲しむローズを人間は認めることができるのか。本書の魅力のうち一つを挙げるとしたら、言葉の可能性と限界に真摯に向き合う点である。ローズは、言葉によって世界を認識し、言葉を通して文化を知り、言葉を架け橋に他者と繋がる。物語の軸となる裁判が、言葉を武器として互いに主張する場であることから言葉の可能性が感じられる。一方、言葉によって定義付けを行う以上そこからみ出るものが出てくるのもまた事実である。

法廷で人間と動物の違いが問われたとき、研究者の答えは「複雑な言語体系を持つか否か」であった。では、言葉を使えるローズは人間か。言葉を持たない他のゴリラたちはどうか。このときローズは気づく。自分が言葉を使えるのは特別なゴリラだからではなく、学習機会を得ることができたからである。語り得る言葉を持つことは幸運である。だが、持たざるものと同様に権利を持っている。ローズとともにハッとさせられ、そして背筋が伸びる。これは決して人間とゴリラの関係に限った話ではないからだ。

(二三六頁 税込一九三五四円 3月刊)



SNSフェミニズム  
現代アメリカの最前線井口裕紀子著  
人文書院

あるインスタグラムにより緊急避妊薬の市販化運動を知り、オンライン署名サイト上で署名したとする。実はこれだけで運動に参加したことになる。このように、現在はSNSを介して誰でも気軽にフェミニズムに参加できる。ただ、SNSがフェミニズムに及ぼす影響を具体的に論じている研究はまだ少ない。そこで、本書はこの点を明らかにするために、参加型政治理論とインターセクショナルリティという概念を用いて、アメリカで活動する三〇〇グループを分析した。

参加型政治とは個人とグループが相互作用して社会に影響を及ぼす政治的行為のことだ。また、インターセクショナルリティとは多様なアイデンティティが交差して起る差別や抑圧を理解するための枠組みだ。この二つを用いてSNSで展開されるフェミニズムを考察すると、次の三点の影響が確認された。一、日常で起るハラスメント等の問題に個人の独自性を維持したまま発信可能になった点。

二、各人のアイデンティティを尊重した上で多様な人々との協働が行われる点。三、特定のグループに所属しない個人による運動参加や文化創造が可能になった点。これら三点が現在のフェミニズム——男女や性的指向に関係なく、平等の実現を目指す運動を形作る。視覚障害や貧富の差などでSNSを利用しづらい人々をどう巻き込むかが今後の課題だ。

著者・井口氏は述べる、フェミニストたちがSNSを使って作り出す世界は宇宙のようだと。であれば、本書はその宇宙を観測する遠望鏡だ。天体観測のお供にいかが。(前髪)

傷つきやすいアメリカの  
大学生たちグレッグ・キアンフ・ジョンソン・ハイト著  
西川由紀子訳 草思社

アメリカでは学生の自主性が尊重される、という話はしばしば賞賛の響きをだめて語られる。だがその自主性が近年、他者への攻撃に向けられていると言ったら読者諸氏はどう思うだろうか。本書ではアメリカの大学で起こった学生による暴力行使の状況と

その背景が分析されている。

有名なBLM運動やアンティファシズムの行動は時に暴力を伴って行われた。本書では大学内でのような運動が活発化しているのか具体的に説明がなされている。保守的・右翼的人物の登壇する集会をリベラルの思想の学生たちが暴力阻止しようとしたという例も本書では挙げられている。また、こうした暴力行動に対して被害者側が訴えを起しても大学側が沈黙する、あるいはかえって彼らに辞職を求めたりする結果に驚かされる。これは右派対左派の争いとは限らない。左派内の穏健派が中道的な発言をしたのに対して極左的な側から非難が加えられ、それに対して右派側が非難の応酬を始めて右派対左派の争いに発展するという状況もあるようだ。

このような争いの根底について本書ではいくつかの要因があると分析されている。特に興味深いのは、アメリカでも子どもに対する過保護な子育てが流行しているという指摘だろうか。子どもが危険に遭つたのをできるだけ回避しようとする親の配慮がかえって子どもを「弱く」している、という著者の見方は、日本の現状とも呼応しているようだ。

まともはいくぶん保守的だが、日本としても見習う部分があるかもしれない。(ね)

(四五七頁 税込三〇八〇円 11月刊)

## 香港少年燃ゆ

西谷格著  
小学館



二〇一九年「逃亡犯条例」改正案反対運動に端を発した香港デモ。同化を強める

中国に対して、香港の自由と民主を守るため「香港人」として市民が声を上げていた。

デモを取材していた著者はある日、最前線で暴力的なデモを行う「勇武派」として全身を武装した一五歳の少年ハオロンに出会う。

本書は、激動の香港を駆け抜けた一人の少年の三年間を記録したノンフィクションだ。

ハオロンは、学校に行かずいつも釣りをしている時間をつぶす非行少年だった。中国出身の母親とそりが合わず居場所のない彼にとって、デモ活動はむしろ現実逃避であり、生きがいだった。でたらめで衝動的で、すぐ音信不通になるハオロンに振り回されながらも、著者は彼に寄り添う。しかし二〇二〇年、コロナ禍で集会が禁じられ、続く「国家安全維持法」制定でデモは終息する。二年後、著者は青年になったハオロンを探し、再び香港を訪れる。何気なく手に取った本書に評者は衝撃を受

けた。香港を取り扱う書籍やドキュメンタリーの多くは、危険なデモの最前線や、参加者の掲げる理想に注目している。だが、本書は現場から一步引いた日常生活の視点から香港を眼差すことで、これまで見過ごされてきたデモ参加者の個人的な動機を描き出しているのだ。また、国安法成立後の香港で静かに生き続ける市民に光を当てている点も意義深い。

狭い街で明るい未来を見出せない少年の、ありのままの生と成長を静かな筆致で描く本書は、無力感と、少しの清涼感が余韻に残る上質なノンフィクションだった。(たいやき)

(三二七頁 税込一九八〇円 12月刊)

## 地域文脈デザイン

まちの過去・現在・未来をつなぐ  
思考と方法

日本建築学会訳者 鹿島出版会



時代の変化とともに、まちのあり方は変わる。その中で、何をその地域の「価値」と捉え、どのように継承するのか。それを考える基軸となるのが「地域文脈論」だ。

本書は、都市計画や開発のこれまでの系譜を読み解いた上で、神宮外苑地区の再開発や筑

波研究学園都市の解体などの事例を用い、現在進行形で課題を抱える地域に求められる「地域文脈デザイン」について論じている。

「地域文脈デザイン」の捉え方は時代によって大きく異なる。世の中の変動が激しい現代において、著者は「正しいコンテクストの決定不可能性」を指摘する。「小さな政府」が謳われ、空間利用が民間資本の競争に委ねられるようになり、地方都市の空洞化や農村部の衰退が問題となっている。さらには地震の活発化、未曾有の感染症や金融危機なども相まって、これまでの確固たるコンテクストが揺らいでいる。様々な流れに揉まれる地域、文脈の読み解きが求められる時代なのだ。

福島原発被災地の実例が印象的だった。震災によって地域の共同体は空間から引き剥がされたように見えた。ところが場所を転々としながら避難生活を送る人々を観察すると、避難社会は郷里と避難所に跨った形で形成されていた。つまり、共同体の消滅ではなく、むしろ新しい生活の可能性が増えた」と読み解くことができる。視覚的な特質のみから「地域文脈」を考えるのではなく、「生存の組み立て」としてそれを読み解くことで、未来に向けて、よりダイナミックな地域の在り方を考えることができるのだ。

(二八六頁 税込三〇八〇円 11月刊)

(荻漢)

## なぜ子どもは神を信じるのか？

人間の宗教性の心理学的研究

ジャスティン・L・バレット 著

松島公望監訳 矢吹理恵・荒川歩他編訳 教文館

子どもの時に神様  
やおぼけを信じてい  
た人は多いのではな  
いだろうか。なぜ子



どもはこうした超自然的概念を信じることができ  
るのだろうか。著者はこう答える。子ども  
は生まれながらに信仰者であるからだ、と。

本書は、前半で多くの実験を通じて子供の  
心のメカニズムを解明し、子どもが自然に神  
の概念を発見し受け入れることを示している。  
キリスト教圏だけでなく、インドやマヤ族と  
いった幅広い文化圏での実験を紹介し、宗教  
的に中立的な立場から説明を試みている。後  
半では、子どもが自然に獲得する宗教と一般  
的な宗教の違い、無神論などにも触れた上で、  
宗教教育について論じている。

本書の後半では著者の信仰者としての意見  
が増えてくる。宗教は社会的つながりを生み  
出し、個人のレベルにおいても様々な目標や  
動機付けをする原理として働き、幸福を生み  
出す手助けをしてくれると著者は主張する。  
こうした主張は宗教になじみの薄い読者には

納得のいくものではないかもしれない。では、  
子ども、ひいては人間は自然に宗教的信念を  
受け入れる準備ができていたという前半の主  
張からの飛躍はどの程度あるのだろうか。こ  
うした科学的主張と宗教的主張の間で批判を  
重ねることが、読者自身の宗教観を再考する  
一助となるかもしれない。

子どもの発達過程を学ぶことは、人間の生  
得的な性質を学ぶことでもある。実験手法自  
体も興味深く、神や宗教に付随するテーマが  
幅広いため、宗教や発達認知科学に興味が無  
くとも楽しめる一冊。 (投稿・篠)

(二四九頁 税込二九七〇円 1月刊)

## ヘーゲル

## 自由と普遍性の哲学

西研 著

河出文庫



本書は一九九五年、  
『ヘーゲル・大人の  
なり方』という表題  
で刊行された本の文  
庫化である。本書では「自由と普遍性の哲  
学」というタイトルになっているがそのテー  
マは変わっていない。それはヘーゲルや  
私欲を前提とした個人が、どのようにして公

共心を持っていくか」という問いなのだ。ヘー

ゲルはまさに私欲を肯定しながら公共性に  
人間の欲望が移り変わっていく様を記述した、  
著者・西研はそうヘーゲルを読み解いていく。

自己意識から理性に移行する過程。家族・  
市民社会・国家へと制度への関心が移行する  
記述。ヘーゲルは弁証法という方法を下に、  
まさに自己意識の成長を説く。三〇年近くの

年月が経ってこの本が文庫化されたのは、当  
時の文脈——ポストモダン思想で徹底的  
に批判されたヘーゲル像をもういちど復興さ  
せること——がいまだ有効だからだ。何故世  
界を愛では救えないのか、何故個人が自由気  
ままではいられないのか、若者が持つ素朴な  
悩みが批判され記述されていく。

昔この本と出会った時「大人のなり方」と  
いう言葉に説教臭さを感じた。そして読んで  
みて自分の思考や行動の幼さがまさまじと記  
述されていて背筋が冷たくなった。西研の説  
くヘーゲルは愛や私欲を否定しない、ただそ  
れらを徹底した先に、そのままではいられな  
い壁とぶつかることを描く。

今読んでみて、あの頃認めたくなかったこ  
の思想を、どこか当然だと思っている自分が  
いた。それはどこか哀しさと寂しさがあった。  
私の敵はいつもヘーゲルだった。(きもの)

(三六四頁 税込九九〇円 3月刊)

## 佇む傍観者の哲学

— ショーペンハウアー救済論に

おける無関心の研究

鳥越寛生著 晃洋書房



我々は「生きんとする意志」に操られ、意志にとって都合の良いように世界をつくり、捉えているに過ぎない。ショーペンハウアーはこのようなペシミスティックな世界観の哲学者、あるいは数々の箴言を残した舌鋒鋭い文筆家として紹介されるのが常だ。そんな刺々しいイメージに反し、著者は彼の哲学を「無関心」「佇む」という静かなるキーワードで貫き、「ただ一つの思想」全体を縦走することを目指す。

本書の鍵となる「無関心」とは何か。これは、自らの利害関心に基づいて見たくないものを無視することでは決してなく、利害関心から離れ、日頃ちやうでもよいものとして意識されている領域に目を向けることである。したがって無関心に佇みこの世界を傍観するということには、自然美の晴れやかさを感じることや、エゴイスタディックな現実社会を問う直すこと、更には聖者が他者の苦悩に同情し献身することまでもが含まれる。

著者はショーペンハウアーにおける「無関心」を真・善・美の三つの領域に分けて考察し、彼の思想を再構成する。そうして語り直される彼の救済論は、世界の残酷さと己の罪深さを見た者が陰徳の中で安らぐ静かな境地だ。理性認識による自己決定権奪還の物語、とも読まれうる彼の救済論に、「無関心」の観点からこのような読み方が提示されるのは興味深い。また、しばしば言行不一致とされる彼の生涯が「佇む傍観者」として擁護されている点も、読者に新鮮な視点をもたらすだろう。

(二七〇頁 税込四九五〇円 12月刊)

(投稿・朝露)

## アーレントと革命の哲学

『革命論』を読む

森一 郎著

みすず書房



「革命」——一九六〇年代の血気盛んな若者ならいざ知らず、現代の若者にとってこの言葉は、どこか否定的な響きを持っているのではないか。「革命」には「暴力」が不可避的に付きまとう。それゆえそれは危険である——これが私たちの一般的な革命観

であろう。私たちは「革命」と「暴力」を同一視し、それを無思慮に忌避してしまう……。

しかし、二〇世紀を代表する政治哲学者ハナナ・アーレントは、その主著『革命論』において、これとはまったく異なる革命観を提示した。フランス革命とアメリカ革命を比較考察するなかで、彼女は、暴力によらない革命のあり方を模索したのである。それは血塗られた革命のイメージを刷新し、そこに積極的な意義を見ようとする意欲的な試みだった。そしてこの著作の詳細なテキスト読解に取り組んだのが、本書にはかならない。著者は『革命論』の訳者でもあるため、その読解には確実な信頼が置ける。しかしここで強調したいのは、本書は単なる解説書にはとどまらないということである。なぜか。それは本書の議論が、日本国憲法の改正をめぐる議論や、大学における学生自治のあり方（まさに京大の問題！）をめぐる議論にまで及ぶからである。著者は、テキストに折りたたまれた襞を丁寧に開いてゆき、そこに現代日本の諸問題を考える上での思考の糧を見出すとする。

本書を読むと、現代日本において最もアクチュアルなアーレントの著作は『革命論』ではないかとさえ思えてくる。テキストの可能性を最大限にまで引き出した一冊。(はや)

(三二〇頁 税込四四〇〇円 12月刊)

西洋書物史への扉

高宮利行著

岩波新書

本書はその題が示す通り、西洋の書物の歴史を概観し、壮大な書誌学への扉を開く。ハード面の歴史のみならず、人々がどう書物と向き合ってきたかを描く点も興味深い。古代の蠟版や木版に始まり、パピルスの卷子本から羊皮紙の冊子本へ、写本から印刷本へと移行する過程は、新しい媒体が「既存の方法論や思考形態を変化させ」る過程でもあり、これはデジタル化が進む現代を生きる我々も共感できるであろう。

技術は移り変われどいつの時代にも熱狂的な愛書家が存在しており、彼らのおかげで幸運な書物のいくつかが現代に残る。書物が残っているというのは案外偶然なのだ。だから、気がつけば増えている家の蔵書も、いつか二一世紀を伝える貴重な資料となる日が来るかもしれない。そんなことを想像すると、本を所有することにロマンを感じる。

本書は多くの図版を含む。形あるものとしての書物の存在感、そして美しさに魅了される。本を手に取り、その重み、手触り、匂いを味わいたくなる一冊である。

(二二二頁 税込二一〇〇円 2月刊)

友情を哲学する

七人の哲学者たちの友情観

戸谷洋志著 光文社新書

私たちは自律的であることを望む一方で、しばしば友人関係に囚われ、他者に依存してしまふ。しかしだからと言って、友人を捨て一人で生きることが難しい。理想的な友情とはいかなるものか。筆者はアリストテレス、カント、ニーチェをはじめとする七人の哲学者たちの友情観を紹介し、漫画に登場するエピソードを例として用いながら、画一的でない多様な友情のあり方を示すことを試みる。

その一人ヴェイユはあるべき友情を次のように考える。他者を想像してはならない。想像で作り上げた他者を愛することは押し付けであり執着を生むからだ。私たちはそのままの姿の他者を、自然が人間に恵みを与えるように、見返りを求めず愛さなければならぬ。それぞれの哲学者らの友情観に触れる中で私たちは、自らの友人関係を省みる。本書は私たちが抱える友情について、そのあり方を肯定する、あるいはより望ましいものへと作り変える道しるべを示してくれるはずだ。別れと出会いが交錯し、友人関係が大きく変化する年度始めに読みたい一冊。(投稿・アミ)

(二二七頁 税込九九〇円 2月刊)

不倫

実証分析が示す全貌

五十嵐彰・迫田さやか著 中公新書

現代の日本社会は、不倫——既婚者が配偶者以外との性交渉をもつこと——への関心に満ちている。政治家や芸能人の不倫は世間を騒がせ、友人や家族、職場の同僚といった日常的な人間関係の中でも噂が聞こえてくる。身近な関心事であるが、見えないところで行われる不倫の実態は闇に包まれており、個人的な経験に基づいた俗説が流布している。

本書は、六六五一人を対象にしたアンケート調査を基に不倫を統計的に分析し、日本社会における不倫の傾向を体系的に検討することを試みている。なぜ人は不倫をするのか、何パーセントの人がしているのか、どこでどのように相手と出会い、別れるのか、誰の不倫を誰が非難するのか。客観的に羅列された数字から俗説の真偽や意外な真実が導き出され、不倫の実態が明らかにされていく。

統計データの分析と考察が整然と紙面を埋める構成は、新書としては明らかに異質だ。好奇心と感情を掻き立てるテーマだからこそ、実証分析の徹底された客観的視点は、隠された日本社会の一面を暴き出す。(たいやま)

(二二三頁 税込九〇二元 1月刊)

## 自然と感性史——アラン・コルバンを読む

### 天候と感情

突然の豪雨かと思えば、すぐさま真っ青な空に太陽が輝く。夏は猛暑、冬は大雪と極寒のニュースが巷に流れる。そう、古今東西、天候は人々の頭を悩ますものであった。しかし一方で、その移ろいは人々の感性を刺激する。天候が与える視覚的、聴覚的、触覚的刺激は人間の感情を揺さぶり、時に創作意欲をかき立てる。「感性の歴史学」を構築し、歴史学領域に新風を吹き込んだアラン・コルバン。数々の名著を著した彼が今回試みたのは、「大気現象が生じさせる関心、表象、欲望、快楽、嫌悪のあり方」を辿ることであった。快と不快、恵みと破壊、憂いと喜び、様々な二面性を湛える天候に人々はいかなる感情を抱いたのか。『雨、太陽、風 天候にたいする感性の歴史』（藤原書店）において彼は、



従来史料とされてきた気象学的データではなく、文学や美術作品を考察対象として、天候に対する人々の生きた声を掘り取ろうとした。天候に対する人間の感性と、それを語るためのレトリックが研ぎ澄まされていったのは一八世紀に入ってからのことである。一例として、雨についての言説を見てもよい。あるフランスの作家は驚くべきことに、雨がもたらす嫌悪感から快感が生じることに気がついた――「たとえばじょう降りて、苔むした古い壁にそって雨水が流れるのを目にし、雨音にまじる風のつぶやきを聞くと、私は悦びを感じる。この憂いに満ちた音は、夜のあいだ私を穏やかに深い眠りへとよぎらう」。憂いから生まれる心地よさ。種々の気候が生み出すこの複雑な感性が文学において表象されるようになったのは、

近代化が人々にもたらした余裕と閑暇の産物ではなろうか。天候がもたらす甘美さや崇高さ、さらには身体への効能が周知され始めたのは、存外最近のことなのだ。

### 草と感情

天候が二面性、あるいは多面性を抱えているように、大地に息づく草もまた人々に様々な感情を引き起こしてきた。『草のみずみずしさ』（藤原書店）においてコルバンは、古代から近代に至る文学・絵画における草の表象を追いかけた。今回はほんの一例を紹介しよう。牧歌詩において、草原は魂の休息をもたらす場として描かれてきた。他方、草のなかは時として人々の情欲をかき立てる。ペトルルカが繰り返して描いたのは、緑の間から覗く白い乙女の足先であった。その美しさは慎ましく、神秘的だが、



時代を下るとつれ、草むらでの恋路はより赤裸々に語られるようになる。モーパッサンに向けて彼の愛人は言う――「わたしはずっと、ある夏の日、野原の真ん中で丈の高い草に横になり、土と匂いと虫の立てる音に囲まれて抱き合うのを夢に見ていました。ほんとうに太陽と大地、風の一部になったような気がするはずですよ。……」あなた、わたしの感覚をわかってくれませんか。わたしが『禁じられた』欲望の伴侶であることを承知ではありませんか。癒いや休息を与える心地よい場所としての草の表象が、ここでは、性の解放内面の暴露、つまり新たな時代の到来を告げる。

新緑明え出づる季節がやってきた。外に出たくもつうずうすする季節。自然からあなたは何を感じとりますか。(はらした)

## デヴィッド・グレーバーの世界

昨年十一月、デヴィッド・グレーバーの最初の著書である『価値論』の邦訳がようやく出版された。日本では『負債論』とそれから『アルシット・ジョブ』で大きく知られた人類学者・グレーバー。最も影響を受けた人物は、『贈与論』で有名なモース。ウォールストリート占拠運動で主導的な役割を果たしたアナキスト活動家でもある。刺激的な著作を刊行し続ける彼の根幹、その理論的背景には何があるのだろうか？ 日本のファンの一人として、『価値論』の邦訳を待ちわびていた。ところが……

\*

「なんだ、この本は!?!」グレーバー・ワールドの原液、まさにそんな感じ。読み進めるうちあちからこっちへ——西洋の哲学的伝統からマダガスカル儀礼へ、詳細な文化人類学的記述から価値の抽象理論へと——話題が入れ替わり、繋がりがグレーバーの世界へと誘われていく。『アルシット・ジョブ』は現代的であったし、『負債論』はまだしも図式的に理解することができたが、これはなかなか骨が折れる。



いや、しかし。そもそも「価値の総合理論」——すなわち経済的価値、社会的価値、さらに記号的価値（意味）という三つの価値の間の根本的関係なるものを真剣に提示しようとする試みが、これまであっただろうか？ そしてそのような観点からマルクス以後の思想潮流をレビューし、さらに文化人類学の知見を加えて自ら理論を作り出そうとしたことが？ 意欲的かつ魅力的な試みの前では、難解さや多少の舌足らずさはむしろ理論的広がりの可能性である。是

非とも若きグレーバーの縦横無尽な思考に食らいついでみてほしい。

\*

それでもいきなり『価値論』には手が出ない、という読者のために、比較的読みやすいであろう他の著書を二冊紹介しよう。一冊目は『民主主義の非西洋起源について』。グレーバーは「民主主義はギリシアに始まる西洋国家の伝統である」という固定観念を否定し、民主主義はむしろ国家と国家の「あいだ」に生きる人々の社会的実践の内にあると主張する。「アナキズムと民主主義はおおむね同じものである」というのがグレーバーの考えだ。



続いて二冊目は『官僚制のユートピア』を勧めたい。母親の介護に関わる書類作成に心底うんざりした経験をきっかけに、グレーバーの思考は官僚制の起源へと遡る……。なぜ「規制緩和」は往々にして官僚的ペーパーワークを増殖させるのか？ なぜ情報技術の進展は自覚ましいのに、「空飛ぶ車」は未だに發明されないのか？ 左派も右派もごぞつて官僚制を批判するにもかわらず、なぜ私たちは結局のところ官僚制を愛しているのか？ エッセー特有の自由な筆致と豊かな連想が川のように流れ出し、私たちの生活の内に実に多くの興味深い見方と疑問を提示する。



\*

グレーバーは二〇二〇年に五九歳の若さで急逝した。そのプロジェクトは未完である。グレーバーに魅入られその仕事を引き継ぐのは、これを読んだ貴方もしれない。

(りうちゅ)

## 編集後記

この5月から綴葉の編集委員となりました浅煎りです。阜月——さつき——という語のさっぱりとした音の響き、漢字の爽やかな佇まい、そしてひらがなの丸みを帯びた柔らかさが、初夏へ勢いよく駆け出したい気持ちと春への名残惜しさにぴったりですね。私は5月になると不思議とうきうきしてしまいます。

それでは、今月号でも取り上げた穂村弘の処女作『シンジケート』からご挨拶に代えて。

シャボン玉で作った豹は震えながら

輝きながら五月の森へ

それではどうぞ、よろしく願い致します。

(浅煎り)

同じく新しく編集委員となりましたひるねです。ひるねというのは実は私のねこの名前です。本を読んでいるときも原稿を書いている今この瞬間も膝の上を陣取り、人間とともに日々文字を見つめて暮らしています。

そんな文字にまつわる一文で「私たち人間は、ごはんと物語を食べて成長する」というものがあります。辻村深月『凍りのくじら』の文庫版解説から瀬名秀明による言葉です。文字からなる物語をたくさん摂取して豊かに生きていきたいものです。

こんな一人と一匹のひるねをこれからどうぞよろしく願いいたします。

(ひるね)

## 当てよう！ 図書カード

鴨川沿いを歩いていると新緑の眩しさと初夏の香りを感じます。そろそろアイスコーヒーが飲みたくなる気温ですが、華やかな香りと甘酸っぱさを感じられる「浅煎り」はアイスで飲むのがお勧めです。ところで、コーヒーの発祥の国はどこでしょうか？

1. カンボジア
2. モロッコ
3. エチオピア
4. サウジアラビア

(浅煎り)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは6月15日です。



《1・2月号の解答》 1・2月号の問題の正解は、4. の白峯神宮でした。白峯神宮には「まり」の守護神として「精大明神」が祀られており、4月14日の淳仁天皇祭では「蹴鞠」が奉納されます。図書カードの当選者は、さんどさん、みかりんさん、焼き鳥さん、ハーダーさん、Born to be free さんの5名です。当選おめでとうございます。

## 読者がらひるね

〇ちょうど、自分とは異なる人生に触れられる本が読みたいと思っていたので、特集のテーマが「自伝・評伝」で嬉しかったです。

(教育字部・さんど)

— 楽しんでいただけこちらも嬉しいです！まるで小説のように奇想天外なものであったとしても、実際に現実であったことであるというのが自伝や評伝の大きな魅力だと感じます。自分の人生も、他の人や未来の人の目には奇妙な物語のように映ったりするのでしょうか、なんて想像してみるのも楽しいですね。

〇絵本特集とか？ どう？ ひさしぶりに『百万回生きた猫』を読みました。絵本って大人になってから読む感動、年齢をうんと重ねて読み、また都度感動できますね……。編集部の方々のおすすめ絵本を知りたいです

(いみみん)

— 絵本、私も大好きです！ 絵と文章両方で語られる物語の世界、大人になってもずっと楽しめるものだと思います。大学生になつてから読んだショーン・タンさんの作品は、不思議な物語の中に人生哲学が詰まっています。本を開く度じっくり物語の意味や自分の人生について考えたくくなります。

(黄丹)